

令和4年度 山形市立第三小学校 校内研究の概要

1 学校教育目標

ともに学び、豊かなくらしをつくる子ども

・ ㊦ころ豊かに・ ㊤なびを高め・ ㊤らし広がる・ ㊤わやか三小

2 研究の概要

(1) めざす子どもの学びの姿

■ **「主体性」** …… 自分の願いをもち 学び続ける子ども

子どもたちが学習問題や課題に対して解決の方法やねらいを明らかにし、願いや思いをもって進んで学ぶ姿をめざす。

■ **「協働性」** …… かかわりながら ともに学ぶ子ども

子ども人は対象（人・もの・こと）とのかかわりを通して多くの知識を得たり、経験を積んだりしながら確かな力を身に付けていく。対象とかかわりながら、より質の高い豊かな学びを生み出す子どもの姿をめざす。

■ **「創造性」** …… 学んだことを 生かそうとする子ども

学んだこととは、獲得した知識や技能（知的な側面）だけでなく、学習から得た喜びや自信など（情意的な側面）、さらには問題を解決するための「見方や考え方」、「学び方」も含まれる。これらを総動員して直面する問題を解決しようとする子どもの姿をめざす。

- 「主体性」「協働性」「創造性」を「子どもを育てる3つの柱」にし、校内研究を中核としてカリキュラム全体で育む。
- すべての教育活動を学びの場としてとらえ、子どもたちの育ちをとらえていく。
- この3つの視点はそれぞれが明確に分けられるものではなく、目の前にあらわれている子どもの学びの姿を価値付けて積み重ねていく。

(2) 研究テーマ

子どもの粘り強さと自己調整力を育む
～見方・考え方を軸にした授業づくり～

学習中の主体性を「学びに向かう力」と捉え、具体的な資質・能力として「粘り強さ」と「自己調整力」を位置づける。

①粘り強さ

「粘り強さ」を生む内発的動機づけの中で、「おもしろい!」と「役に立つ!」の2つを協働的な学習を中心にして育む。

- 「おもしろい!」…見方・考え方の理解による教科への知的関心
 - 「役に立つ!」…見方・考え方の活用（他単元・他教科・実生活）による学習有用感
- そのために、指導案に以下の3つを明記して、授業作りを進める。
- 学習指導要領を基にした見方・考え方→教科としてのおもしろさ
 - この学習で学ぶ見方・考え方がどこで（他単元・他教科・実生活）役に立つのか

②自己調整力

「自己調整力」の基盤を「メタ認知」「計画力」「調整力」と捉え、協働的な学習や個別最適な学習で育む。

- メタ認知＝ふりかえり
- 計画力＝見通し＝論理的思考力
- 調整力＝修正力

そのために、単元作りで以下の2つを大切にしていく。

- 単元のはじめに単元計画を子どもと作る（または子どもに単元計画を提示する）
- 単元のおわりに単元を終えてのふりかえりをする（または単元で学んだ見方・考え方がどのように活用できるのかを教師が明示する）

(3) 授業作りの3つの重点

① 資質・能力の確認 ⇒ 授業のゴールイメージをもつ

この授業で子どもは何かできるようになるか、授業のゴールイメージを教師はもっているだろうか。子どもにどんな資質・能力が身に付いていて、そして授業を終えて、どんな資質・能力が高まっていればいいかを、教師は描いているだろうか。授業のゴールを能力ベースで教師が描くことが、授業作りのスタートである。そのためにも、各教科の系統性への関心を高めていきたい。

② 各教科ならではの学習活動 ⇒ 子どもがどのように学んでいくか

学びのゴールに向かうために、子どもはどのように学んでいくか（子どもの学びの文脈）を考えていくことが重要である。国語の授業であれば「言語活動」、算数であれば「数学的活動」と、各教科にはその教科ならではの学習活動がある。教師は、授業のゴールイメージを、その教科ならではの学習活動にのせて、授業を作っていくことが重要である。その際、1 単位時間をどうするかではなく、能力ベースの単元デザインをどう描いていくかを大事にしていきたい。

③ 見方・考え方を働かせる ⇒ 各教科ならではの対象とのお付き合いの仕方

見方・考え方とは、各教科ならではの対象への目の付け所（見方）や各教科らしい追及姿勢（考え方）のことである。

子どもは就学時にすでに、曖昧な知識だったり素朴概念と呼ばれる膨大な知識だったりをもっている。少なくとも、小学校で教える事柄であれば、子どもはそれに関わる何かしらの知識や経験をもっている。つまり、各教科の見方・考え方の「タネ」を子どもはすでに持っている。

その子どもがもっている「いい線はいつているが、不正確であったり断片的であったり直観的であったりする『タネ』」を、各教科ならではの対象とのお付き合いの仕方（＝見方・考え方）に沿って、洗練したり統合したりしていくことが、見方・考え方を働かせた学びである。そして、洗練させたり、統合していけるよう促したりすることこそが、教師の役割である。教師が漫然と指導していたら、子どもの見方・考え方を磨くことはできない。よって、授業作りでは、どうすれば、子どもの見方・考え方を働かせることができるのかを考えることが重要である。

(4) 研究の方法

本研究では、①指導案作成－②事前研－③本時の参観－④事後研－⑤実践記録の5つを1つのパッケージと捉え、実践していく。そのために、5つ全てのプロセスで、子どもの粘り強さと自己調整力を育む授業作りになっているかどうか、授業づくりの3つの視点で、話し合い、実践し、改善していく。

① 指導案作成

子どもの「粘り強さ」を高められるように、「見方・考え方の理解による教科への知的関心（算数っておもしろい!）」と「見方・考え方の活用による学習有用感（この学習は役に立つ!）」が高まることを目指す。そのために、

- その単元をなぜ学ぶのか（Why）を学習指導要領で確認する。
- 何を学ぶのか（What）を学習指導要領で確認し、この学習で学ぶ見方・考え方がどこで（他単元・他教科・実生活）役に立つのかを設定する。
- どのように学ぶか（How）について、算数ならではの学習活動（数学的活動）を確認し、授業の流れを組み立てる。
- 数学的見方・考え方を働かせるための教師の具体的な手立てについて記載する。

また、子どもの「自己調整力」を高められるように、「メタ認知」「計画力」「調整力」が高ま

ることを目指す。そのために、

- 単元のはじめに単元計画を子どもと作る（または子どもに単元計画を提示する）
- 単元のおわりに単元を終えてのふりかえりをする（または単元で学んだ見方・考え方がどのように活用できるのかを教師が明示する）

② 事前研

- 子どもが「粘り強さ」を高められるように、見方・考え方の理解による教科への知的関心（算数っておもしろい！）を感じられる授業になっているかを検討する。
- そのために、その単元をなぜ学ぶのか（Why）を学習指導要領で確認する。
- 子どもが「粘り強さ」を高められるように、「見方・考え方の活用による学習有用感（この学習は役に立つ！）」を感じられる授業になっているかを検討する。
- そのために、何を学ぶのか（What）を学習指導要領で確認し、この学習で学ぶ見方・考え方がどこで（他単元・他教科・実生活）役に立つのかを検討する。
- 算数ならではの学習活動（数学的活動）に沿った授業の流れになっているかを検討する。
- 教師の具体的な手立てが、その教科の見方・考え方を働かせるための手立てになっているかどうかを検討する。

③ 本時の参観

- 子どもの「粘り強さ」と「自己調整力」が高まっているかどうかを参観する。
- そのために、「見方・考え方の理解による教科への知的関心（算数っておもしろい！）」や「この学習で学ぶ見方・考え方がどこで（他単元・他教科・実生活）役に立つのか」を感じられる授業になっているかに注目する。

具体的には・・・

- 本時で目指す資質・能力は、本当にそれでよいのかどうかに注目する。
- 算数ならではの学習活動（数学的活動）に沿った授業の流れになっているかに注目する。
- 教師の具体的な手立てが、その教科の見方・考え方を働かせるための手立てになっているかどうか注目する。

授業を参観する際、詳細な授業記録をとり、教師の意図や子どもの思いをとらえながら、参観するよう心掛ける。また、授業の主役は子どもなので、子どもの思考の邪魔をしないように、授業中の子どもに話しかけたり、参観者同士で授業内容について話し合ったりしないようにする。

④ 事後研

事前研と同様。

⑤ 実践記録

- 指導案作成－②事前研－③本時の参観－④事後研のプロセスを通して、子どもの「粘り強さ」と「自己調整力」が高まったかどうかを振り返る。
- そのために、自分の授業づくりを3つの視点で振り返る。
- 自分の設定した「目指す資質・能力」は、「見方・考え方の理解による教科への知的関心（算数っておもしろい！）」や「見方・考え方の活用による学習有用感（この学習は役に立つ！）」が高まることにつながっていたか。
- 自分の実践が、数学的活動に沿った授業の流れになっていたかどうか。
- 自分の考えた具体的な手立てが、その教科の見方・考え方を働かせるための手立てになっていたかどうか。

(5) 研究の窓口

R3 年度までの研究を通して、特定の教科に限定せず、自分の選択した教科で研究授業を行うことにより、「どの教科にも見方・考え方がある」という理解につながった。さらなる学校研究のレベルアップのために、R4 年度からは、1つの教科にしぼって「見方・考え方」について深く議論していくことを目指す。

そこで、今年度から研究の窓口を、算数としていく。（こまくさ・ことばについては、実態に応じて算数以外の教科を窓口にしてもよい。）理由は以下の2つ。

- 三小の子どもの「粘り強さ」を育むため。

三小の子どもの客観的なデータで分析すると、ここ数年は算数に対する主体性の低さが課題に挙げられる。算数の見方・考え方の理解による教科への知的関心＝「算数っておもしろい！」ということを感じられていないことが原因と思われる。

	R3	R1	H30
算数の勉強は大切だと思いますか？	72.3	73.1	66.7
算数の授業で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つと思いますか？	72.3	61.2	63.9
算数の勉強は好きですか？	38.5	26.9	23.6

(全国学テ 児童質問紙より)

- 三小の子どもの「自己調整力」を育むため。

「自己調整力」の基盤となる「計画力」＝「論理的思考力」である。論理的思考力を育むために、算数を窓口にしていく。

(6) 研究の計画

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
低学年			校内研	校内研	指導案 検討		校内研	校内研	全校研 ①	校内研		
中学年			校内研	校内研	指導案 検討		校内研	校内研	全校研 ①	校内研		
高学年			校内研	校内研	指導案 検討		校内研	校内研	全校研 ②	校内研		
こまくさ			校内研	校内研	指導案 検討		校内研	校内研	全校研 ②	校内研		
研究部	研究会 全体会	全校研 (研究 主任)						研究会 全体会		研究会 全体会		

- 各校内研の日時は R3 年度の間、R4 年度教育課程に組み込み、授業研究日を事前に決めておく。
- 5月に第1回全校研を行い、R4年度の研究の進め方について全体共有する。
- 5月に年間の授業研究日のうち、いつだれが授業研を行うかを定める。
- 11月に全体研2回目と全校研3回目を行う。その際、斎藤一弥先生に指導・助言をいただく。
- 8月に11月の全校研2回目と全校研3回目の指導案検討を行う。その際、斎藤一弥先生に指導・助言をいただく。

校内研	A 数と計算	B 図形	C測定 変化と関係	Dデータの活用
低学年				
中学年				
高学年				
	↓	↓	↓	↓
全校研 (各学年で1つ) (各領域で1つ)			×	

- 全校研は低中高の学年部から1つずつ行う。

- 算数の領域ごとにバランスよく分かれ、各領域から1つずつ全校研の授業ができるようにする。

(7) 研究の反省

1月の研究全体会で、三小の子どもの粘り強さと自己調整力がどのように高まったかどうかを振り返る。また、三小の子どもの粘り強さと自己調整力を高めるために効果的であったこと（成果）と、三小の子どもの粘り強さと自己調整力をさらに高めるために必要なこと（課題と改善策）について振り返る。